

茨城県玉造町

八木蒔小池平遺跡

平成 5 年

玉造町教育委員会

序

茨城県の南部に広がる湖、霞ヶ浦に面している玉造町は、町中央部を樅無川が流れ、北西には鎌田川があり、小川町と町境をなしています。古くから農業で発展した地域で今でも行方台地では畑作を、沖積低地では稻作やイチゴ栽培が盛んに行われています。

これらの台地には、考古学上貴重な遺跡や遺物が眠っており、原始古代から現在に至る人々の営みを知る重要な歴史的遺産となっています。

今回の調査は、国道355号線のバイパス的役割を果す町道2427号線改良工事に伴うもので、町道の北西部に位置する八木崎地区で、新たに発見された小池平遺跡の一部記録保存を目的に実施されました。

この地域は、古代中世を通して橘郷として多くの文献でも確認できる地域であり、隣接する現原地区も若舎人郷として古代から中世にかけて繁栄した地域で記録が残されており、今回の調査は当時の集落や境界等を探る上で、貴重な資料を提供してくれています。調査が工事にかかる道路幅分ということもあり、遺跡の全体像は掴めませんでしたが、当遺跡の保護保存に力を注ぎ、玉造地方の歴史文化の研究と伝統文化の継承に努力して行く考えです。

調査に際しましては、玉造町建設課のご理解をいただきとともに、全面的なご支援を賜り終了することができました。また、調査の担当をして下さいました大賀 健先生をはじめ、地元の方々には発掘調査の作業から水や土地利用の提供までご協力をいただきましたこと深く感謝いたします。

平成5年3月

玉造町教育委員会

教育長 渡邊正則

例　　言

1. 本書は特防玉造町道2427号線道路改良工事に伴う、茨城県行方郡玉造町大字八木戸字小池平1,187-1他に所在する小池平遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は玉造町から要請を受けた玉造町教育委員会が主管し、玉造町遺跡調査会並びに山武考古学研究所の協力のもと1993年3月10日から27日まで延べ18日間にわたり行った。
3. 調査面積は、工事に係る600 m²である。
4. 遺物整理及び報告書の作成は、1993年4月下旬より8月下旬まで、玉造町中央公民館並びに山武考古学研究所で主に行なった。
5. 図版写真は遺構写真を大賀、遺物写真は野平が撮影したものを使用した。
6. 遺物の実測・トレースは井上とみ子・金子浩美・佐久間亜美・野平伸一が行った。
7. 本報告書の執筆編集は大賀・野平・高槻が行った。執筆の分担は以下の通りである。

第1章第1節・第2章　　高槻　栄治

第1章第2節・第6章第1～3節　　野平　伸一

第3～5章・6章4節・第7章　　大賀　健

8. 調査に関わる遺物・図面・写真等の資料は玉造町中央公民館に於て保管してある。
9. 本調査報告書作成に当たっては多くの方々や関係機関にご助言やご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略・順不同)

小松崎平・千ヶ崎正英・千ヶ崎秀一・千ヶ崎浩・千ヶ崎武房

茨城県教育庁文化課・茨城県鹿行教育事務所・同所社会教育主事石川孝・同所文化財指導員橋本正雄・玉造町役場建設課・同課闇口安夫・同課大森一夫

10. 小池平遺跡発掘調査は、下記の者が担当し実施された。

調査会長　　成島誠二　　玉造町文化財顕彰会長

事務局　　渡邊正則　　玉造町教育委員会教育長

　　真家幸治　　玉造町教育委員会教育次長

　　池畠正夫　　玉造町教育委員会社会教育係長

　　高槻栄治　　玉造町教育委員会社会教育主事

　　小谷和弘　　玉造町教育委員会社会教育主事

調査員　　大賀　健　　山武考古学研究所調査研究室室長補佐

調査補助員　原喜代子

作業員　　田中孝治　　鶴賀　豊　　松沢義正　　荒木田福子　　大和田きく

　　甲タキ子　　甲　洋子　　田巾まつ枝　　箱根　幾

抄 錄

フリガナ	コイケダイライセキハックツショウサホウクショ							
書 名	小池平遺跡発掘調査報告書							
発行者名	小池平遺跡調査会							
所 在 地	〒311-35 水城町玉造町甲404 玉造町教育委員会社会教育係							
編著者名	大賀健・野半伸一・高榮栄治							
編集機関	山武考古学研究所							
所 在 地	〒286 千葉県成田市並木町221番地							
発行年月日	西暦1993年10月31日							
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小池平	水城町玉造町 下造八木溝 1,187-1他	08425		36° 7' 45"	140° 24' 15"	1993.3.10 1993.3.27	600m ²	特防土造 町道2427 号線道路 改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 墓	主 な 遺 物		特 記 事		
小池平	集落跡	奈良・ 平安時代 近・現代	堅穴式住居跡 道 溝 土坑	3軒 2条 1条 6基	上飾器 須恵器 土製品 鉄製品 石製品	壺・瓶・蓋・高台付壺・ 皿・壺・环・蓋・高台付環・ 盤・壺・蓋・台付環・ 支撑・土玉・手探 刀子・鉄津 砥石・磨り石・根		

凡　　例

1. 第1図周辺遺跡分布図には国土地理院2万5千分の1『玉造』を用いた。
2. 遺構の挿図について

○本報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は下記の通りである。

遺構配置図 1/200 住居跡 1/60 住居跡カマド 1/30

道状遺構 1/120 溝・土坑 1/60

○遺構挿図中のスクリーントーンは下記を表す。



.....鹿沼・道硬質部



.....焼土



.....地山



.....粘土・カマド袖

3. 遺物の挿図について

○遺物に注記した番号は下記の内容を示す。

小池平遺跡 KD 住居跡 H

溝 ミ 住居跡カマド カ

土 坑 土 道状遺構 R

<例>

小池平遺跡1号住居跡カマド出土遺物 No.1 KD 1 H カ 1

小池平遺跡1号道状遺構 No.1 KD 1 R 1

○遺物番号は本文・挿図・写真図版共に一致しており、番号横に注記番号を併記した。

○遺物の縮尺率は下記の通りである。

歴史時代遺物（土器・土製品・鉄製品・石製品） 1/4

縄文時代・弥生時代遺物（土器・石製品） 1/3

○遺物断面を黒塗りしたものは須恵器を示す。

4. 平面図の北方向は座標北を示す。



第1図 遺跡位置図

目 次

本 文 目 次

序

例言

抄録

凡例

日次

第1章 発掘調査に至る経緯と調査経過

　　第1節 調査に至る経緯.....1

　　第2節 調査の経過.....1

第2章 遺跡の位置と環境

　　第1節 地理的環境.....2

　　第2節 歴史的環境.....3

第3章 遺跡の概観.....5

第4章 調査の方法.....5

第5章 上層.....6

第6章 検出された遺構と出土遺物

　　第1節 住居跡.....7

　　第2節 道状遺構.....19

　　第3節 溝・土坑.....21

　　第4節 遺構外出土遺物.....23

第7章 まとめ.....27

　　歐文.....28

写真図版

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 2号住居跡出土遺物	14
第2図 遺構配置図	4	第10図 3号住居跡・カマド	16
第3図 標準堆積上層模式図	6	第11図 3号住居跡出土遺物	17
第4図 1号住居跡	7	第12図 1・2号道状遺構	18
第5図 1号住居跡カマド	8	第13図 1号道状遺構出土遺物	19
第6図 1号住居跡出土遺物	9	第14図 溝・土坑	20
第7図 2号住居跡	12	第15図 遺構外出土遺物	22
第8図 2号住居跡カマド	13		

図版目次

図版1-1 遺構確認状況		図版5-1 1号道状遺構	
1-2 遺跡全景		5-2 同セクションD-D'	
図版2-1 1号住居跡		5-3 同遺物出土状況	
2-2 同セクションB-B'		5-4 2号道状遺構	
2-3 同カマド		5-5 同セクションE-E'	
2-4 同遺物出土状況		5-6 同セクションF-F'	
2-5 同遺物出土状況		図版6-1 1号溝セクションA-A'	
図版3-1 2号住居跡		6-2 1号土坑	
3-2 同セクションA-A'		6-3 同セクションA-A'	
3-3 同カマド		6-4 2号土坑	
3-4 同遺物出土状況		6-5 同セクションA-A'	
3-5 同遺物出土状況		6-6 3号土坑	
図版4-1 3号住居跡		6-7 4号土坑	
4-2 同セクションB-B'		6-8 5号土坑	
4-3 同カマド		図版7-1 1号住居跡出土遺物	
4-4 同遺物出土状況		図版8-1 2号住居跡出土遺物	
4-5 同遺物出土状況		8-2 3号住居跡出土遺物	

表目次

表1 周辺遺跡一覧表

表2 出土遺物編年表

第1章 発掘調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

玉造町を輻輳する国道355号線は、近年リゾート道路としての利用や、県南・筑波学園都市方面への交通網が確立、利用が増大し、通勤時には道路も飽和状態になりそうな様相を呈している。こうした状況の背景には、行方台地を走る県道上山麻生線や町の中央を抜ける県道玉造鹿田線、そして国道354号線も当地方の主要基幹道路として、鹿行地方と県央・県南を結ぶ重要な役割を果しているため交通量が増加し、特に国道355線は、これら幹線を連結させる道路としてより利用度が高いためと推測される。玉造町は、交通の円滑化と整備中の行方縱貫道とのアクセスのために、新たに浜～羽生間の町道2427号線の道路改良工事を計画した。玉造町は、工事に先立ち1992年9月7日、玉造町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の有無の照会をした。玉造町教育委員会はこれを受け、1992年9月29日から30日までの期間現地踏査をするとともに、同年11月7日から11日までの期間に上層調査を行った結果、周知の遺跡は工事の予定地内に含まれていないことがわかったので、その旨を玉造町に回答した。その後用地買収と山林伐壊等が進む中1993年1月17日に工事担当者から土器片の出土の連絡を受け急行し付近の土層観察等をすると、遺構プランを確認したため玉造町建設課担当者に工事の中止を通告した。その後玉造町教育委員会は、文化財保護の立場から新たに発見された遺跡を地名から小池平遺跡とともに、その保護と取り扱いについて茨城県教育庁文化課の指導の下に協議を重ねた結果、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなり、玉造町教育委員会が調査をすることとなった。調査に当たっては、玉造町遺跡調査会並びに山武考古学研究所の協力が得られ、1993年3月10日から3月27日の間調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

3月8日 器材搬入・鍵入れ式

- 10日 本日より調査を開始する。重機による表土除去作業を開始する。
- 11日 重機による表土除去作業に並行して遺構の確認作業と掘り下げを開始する。標準堆積土層と遺構確認状況の写真撮影を行う。
- 13日 重機による表土除去作業を終了する。本日をもって遺構総数を確認する。住居3軒、道2条、土坑6基、溝1条。
- 16日 遺構のセクションの実測、写真撮影を開始する。
- 18日 遺構の平面の実測、遺構の完掘、遺物出土状況の写真撮影を開始する。
- 23日 遺構の掘り下げの作業をほぼ終了する。
- 24日 全体の清掃を行う。遺跡の全景写真の撮影を行う。
- 25日 遺構の実測、写真撮影の終了をもって、現地におけるすべての作業を終了する。
- 27日 終了概要の報告を行い調査を完了する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

小池平遺跡は、行方郡玉造町大字八木蔵の北端に位置し、大字羽生鳥崎地区、大字捺木、そして大字浜の境界に近接し、八木蔵字小池平1187番地1ほかの台地に所在している。

当遺跡のある玉造町は、霞ヶ浦と紫峰筑波を望む風光明媚な温暖な土地柄である。Y字型を呈する行政区は、中央を南北に一級河川榎無川が貫流し洪積台地と沖積低地に二分される。台地は、榎無川の東部が西部より5~10m高く、行方台地の尾根を中心に標高30mを越える。また、当遺跡のある西部地区は標高25m未満の台地で構成されている。

この台地は、成田層あるいは下総層群と呼ばれ、多くは13万年~9万年前に堆積した比較的厚い砂層とそれより薄い泥層や礫層からできている。成田層の上には関東ロームが堆積し、榎

表1 周辺遺跡一覧表

國中番号	遺跡名	遺跡の時代・備考	
1	小池平遺跡	古墳時代~奈良・平安時代	
2	八木蔵貝塚	縄文時代、奈良・平安時代	
3	オチヤク内貝塚	縄文時代	
4	八木蔵古墳群	古墳時代	円墳3基
5	ガウチ塚古墳	古墳時代	円墳
6	兜塚古墳	古墳時代	帆立貝式古墳
7	人形塚古墳	古墳時代	円墳
8	十日平古墳	古墳時代	円墳
9	捺木古墳群	古墳時代	円墳3基
10	槁館	鎌倉・室町	中臣氏居館
11	丹牛館跡	鎌倉・室町	羽生氏居館
12	野口館跡	室町・戦国	玉造氏系野口氏居館
13	箱根館跡	鎌倉・南北朝	箱根氏居館
14	玉造城跡	鎌倉・室町	玉造氏居館
15	石神館跡	室町・戦国	玉造氏系石神氏居館
16	原田館跡	鎌倉・室町	平氏系(平十郎)居館
17	若舍人館跡	鎌倉・南北朝	若舍人氏居館
18	捺木館跡	鎌倉・室町	捺木氏居館

無川の東部には余り検出例のない鹿沼軽石層が薄いながらも堆積しているのが確認される。

八木蔵地区には、国道355号線の旧県道台地の縁辺部と沖積地の微高地である州、そして主要道沿いに集落が形成されてきた。昭和初期に開通された鹿島鉄道の八木蔵駅もあり、長らく通勤通学や物資の輸送の重責を果たしてきたが、当世この車社会ではその機能が十二分に発揮されていないのが現状である。

産業も玉造町周辺の他地域に漏れず、霞ヶ浦湖岸に開けた肥沃な水田を活かした稲作の他みつばや牛蒡等の野菜栽培が盛んである。そして養蚕の隆盛期に建てられた稚蚕共同飼育所がある。当地には、町内企業進出のさきがけとなった歯科治療機械メーカー工場や最近設立された製麺工場等も立地しており、小さな地区ながら職住近接で就労に多様性がある。

遺跡は、西・北側は霞ヶ浦方面から、また南は櫛無川から伸びる開析谷の集中する台地のはば中央に位置し、周辺は畑になっている。谷の縁は開拓されないので山林になっており、特に八幡神社境内とその北東に広がる谷は茨城県自然環境保全地域に指定され、貴重な環境空間を守っているのである。

第2節 歴史的環境

玉造町は、三昧塚古墳に代表されるように町内全域に古墳が分布している。特に調査されている動使塚占墳や形象埴輪「狼」が出土している大日塚古墳等をはじめ、沖洲古墳群を代表に多くの古墳文化が各地で開花したことが遺跡の調査から窺える。

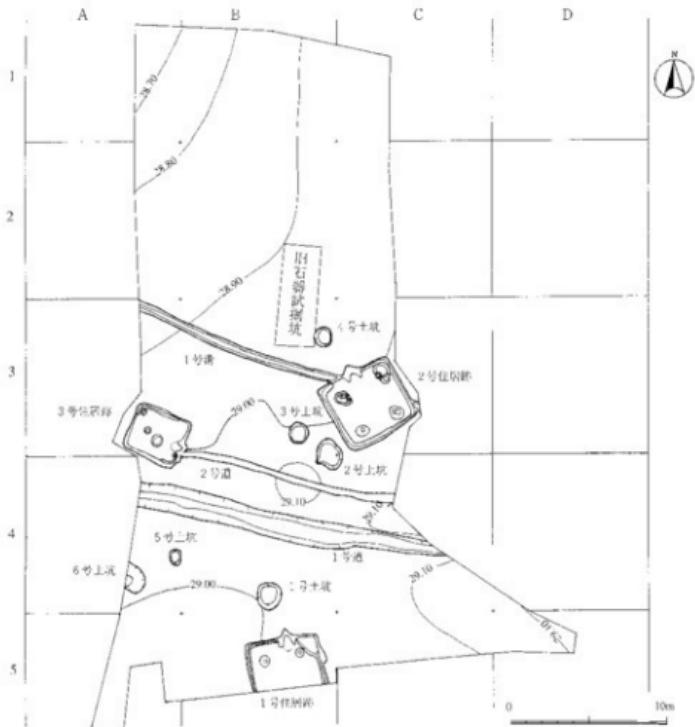
また、縄文時代の生活史を紐解くのに重要な遺跡である貝塚も当町全域に分布しており、昭和20年代には、若海貝塚が慶應義塾高等学校考古学会により調査され、蘿井貝塚も法政大学付属第一高等学校の考古学研究グループの手により発掘調査が行われた。大宮貝塚は、当時茨城県立麻生高等学校教諭であった大森信英氏の指導のもと、町営住宅建設に伴う緊急の発掘調査が実施されるなど、当地方の縄文時代の歴史の再構成に重要な資料が残ってきた。もうひとつ当町では、中世城館が広く分布し上豪たちが群雄割拠していたことが遺跡からも推測されている。特に、中世文書を今に伝える芹沢氏、鳥名木氏は、子孫が居館の近くに住居を構えており、遺跡の解明にも重要な資料を提供していることは、東国では稀であり本格的学術調査が待たれる。城館跡の調査事例は、緊急調査を含め第四次まで行った玉造城跡がある。これらの調査では、城縁辺部の小規模調査のため全体像が掴めていないが、今後の中世考古学に示唆を与える調査例になっているものと考える。

これら代表的な遺跡のほか、先土器時代では上山大峰遺跡や井上地区（井上古墳群第4号墳出土）に確認されている。弥生時代の遺跡では、芹沢平遺跡や井上地区（井上古墳群第4号墳出土）が少ない遺物出土地点である。古墳時代から奈良平安期にかけての集落跡では、泉地区的原遺跡や同地区新堀貝塚、手賀荒原神社馬場前遺跡の調査例はあるが、本格的な分布調査が遅れており早急な遺跡分布把握が待たれている。生産遺跡では、製鉄跡が存在する。

今回発掘調査された小池平遺跡は、こうした埋蔵文化財の保護保存状況下で実施されたわけ

であるが、遺跡周辺の歴史過程を準える時この発掘調査結果は意義深い。

当遺跡は、立花地区の台地中央部に位置し八木戸貝塚が近接している。この貝塚からは縄文時代の加曽利E式土器をはじめ、土師器須恵器も表面採取することができ、小池平遺跡との関係も注目される。同じ台地の東方には、当地から防人として九州防備に赴いた若舎人部廣足の大字捺木若常地区があり、彼の詠んだ和歌が万葉歌碑として刻まれている。また、ここには捺木古墳群が繁栄した古代文化を今に伝え、中世文書の写本である『行方郡諸家文書』に登場する若舎人氏の居館とされる若舎人館跡が、鎌倉時代の地方農村の姿を想定させる。また西方には八木戸古墳群や塙館跡の遺跡があり、小池平遺跡との関連や古墳時代から中世への変遷のヒントコマを偲ばせる。当遺跡がある八木戸地区は古代茨城郡から南郡橘郷に置かれ、平安末期になると常陸国御より鹿島神宮へ寄進されている。その後大権宜中臣氏と国井氏の争いがあり、鎌倉末期には八木戸村が成立したものと推測される。地区内には中世からの遺産である八幡神社が鎮座するとともに、円勝寺境内には大権宜中臣氏の支配を語る石碑が遺され、八木戸地域の人々のくらしが窺える。



第2図 遺構配置図

第3章 遺跡の概観

検出された遺構は、奈良・平安時代の住居跡3軒、道状遺構2条、近世以降の溝1条、土坑5基、時期不明の土坑1基である。これらの遺構は調査区域の南側に偏在傾向を示している。これは、台地が北側に向かって緩やかな傾斜を持つ反面、南側に谷津部が迫るという調査区域の地形から考えて、全体に遺構の分布は希薄であることが推定される。

奈良・平安時代では台地の頂上付近に東西方向に走行する道状の遺構と、それに沿って3軒の集落が検出されている。その集落及び道は出土遺物の年代観、重複の関係を見ても明らかに時間差があり、同時に営まれていたものではない。調査対象区域では該期に於ける集落の密度は疎であったと推測される。今回の調査に先立って行われた試掘調査に於ても、連続する北側の台地上には遺構の検出はなく、台地を南北に継続する調査区に於て南側の一部に遺構が検出されるにとどまっている。推測の域を脱し得ないが、東又は西側に連続する台地上に集落の中心があり、当調査区は集落を連結する道筋に僅かに展開した集落と理解される。

第4章 調査の方法

調査区は任意で1辺10mの正方形グリッドのメッシュを被せ、後日G・P・S（汎地球測位システム）による座標の測定を行った。

グリッドの呼称は調査区域の北西端部をA-1グリッドとし、東に向かいA・B・C・D、南に向かい1・2・3・4・5とした。

遺構の確認作業は、町教育委員会による試掘調査結果に基づいて、第1層を重機により排土した後、第2層上面を人力排土して行った。

遺構の掘り下げは、住居跡は4分割、土坑は2分割、溝・道は任意に3カ所の土層断面観察用のベルトを設定して行った。また出土した遺物は、床面付近の物については記録して取り上げ、覆土中の物については一括して取りあげた。

実測作業は全体測量図は100分の1、住居跡カマド・道状遺構・溝を除く他の遺構図面は20分の1、カマドは10分の1、道状遺構・溝は40分の1の縮尺にて行った。

写真撮影は、各調査の進捗状況に合わせて行い、終了全景はローリングタワーより撮影を行った。又、撮影には白黒大形カメラ1台、35mm白黒・カラーカメラ各1台、カラースライド用カメラの4台を使用した。

調査の進捗状況に合わせ、遺構の検出されなかったB-2・3グリッドに於て土層観察用の深掘り部分を設定し、合わせて旧石器の確認調査を鹿沼軽石層下にまで行った。しかしながら遺物・遺構共に検出には至っていない。

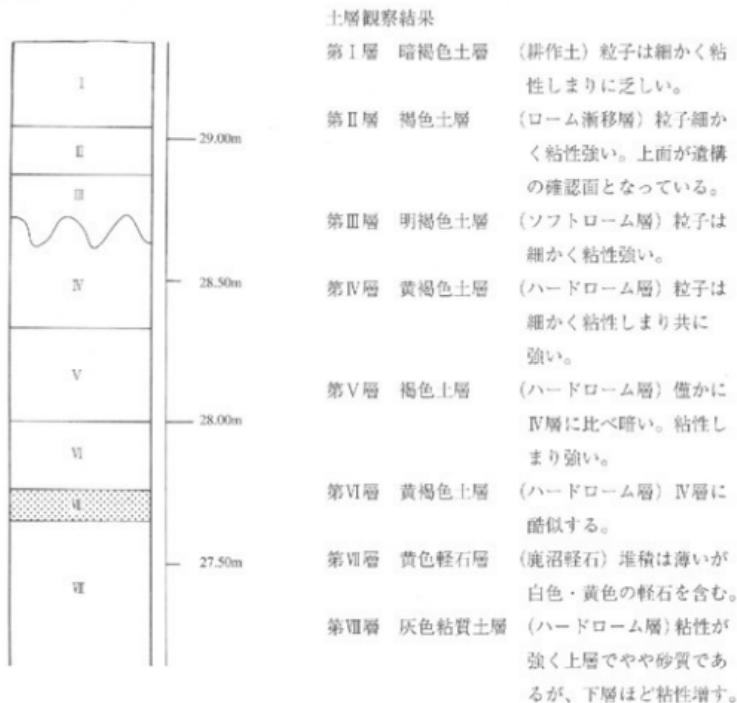
第5章 土層

本遺跡における土層の標準堆積は、旧石器の試掘調査を行った試掘坑（B-2・3グリッド）の南壁に於いて観察した。

全体として褐色を基調とする土層堆積で、ロームの堆積が明瞭である。遺跡が洪積世台地上に位置することを示すものである。

第Ⅰ層は耕作上で30cm程の堆積がある。表土として重機により除去を行った。遺構の確認面は続く第Ⅱ層褐色土（ローム漸移層）上面である。精査を行った結果、前述の遺構がすべてこの面に於て確認されている。

遺構の掘りこみは1・2号住居跡、4号土坑で深く、第Ⅳ層のハードローム層にまで及んでいる。又、2号道状遺構や土坑の一部等には第Ⅲ層ソフトローム上面で掘りこみが止まる遺構もある。



第3図 標準堆積土層模式図

第6章 検出された遺構と出土遺物

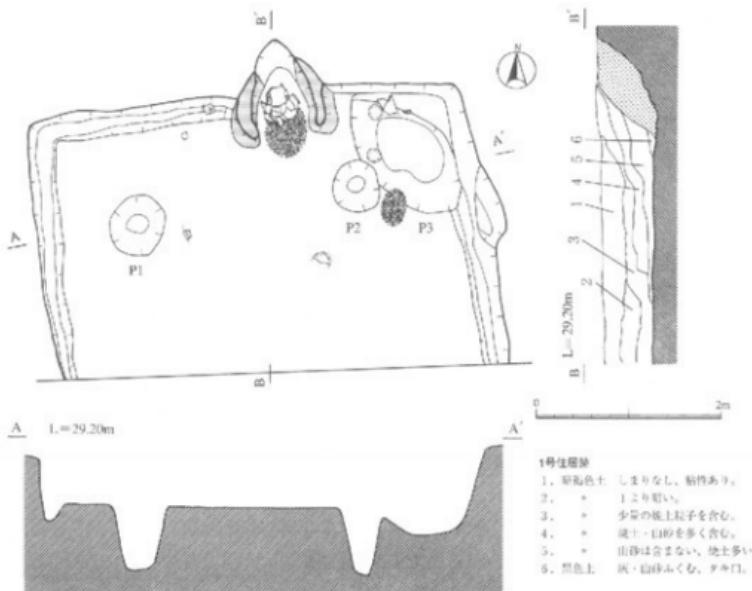
第1節 住居跡

1号住居跡（第4・5・6図、図版2・7）

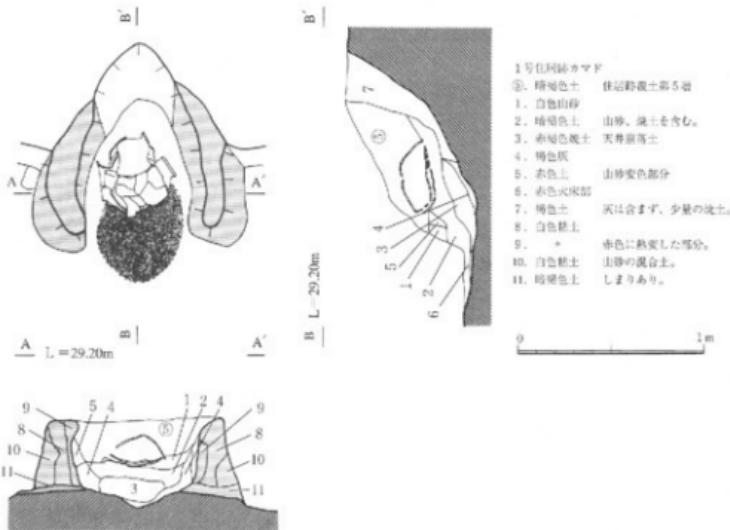
本住居跡は調査区の南側B-5グリッドに於いて検出された。南側は調査区域外となるが、検出状況より主軸がN-10°-Wを指向する方形を呈すものと思われる。主軸方向の規模は不明であり、東西軸は4.68m程を測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、色調、粘性、焼土・山砂の含み具合から6層に分層される。堆積状況は自然堆積である。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は48~63cmを測る。東壁北側の壁の一部が突出してテラス状になっている。テラス部分は床面からの高さ40cm程を測り、南北幅48cm、東西幅15cm程を測る。壁溝はカマド部分及び北東角を除いて確認され、幅7~15cm、深さ12~15cmを測る。床面はほぼ平坦であり、全体によく踏み固められている。P3付近に焼土が分布している。ピットは3基検出されている。P1とP2は主柱穴と思われる。残る主柱穴は調査区域外のため



第4図 1号住居跡

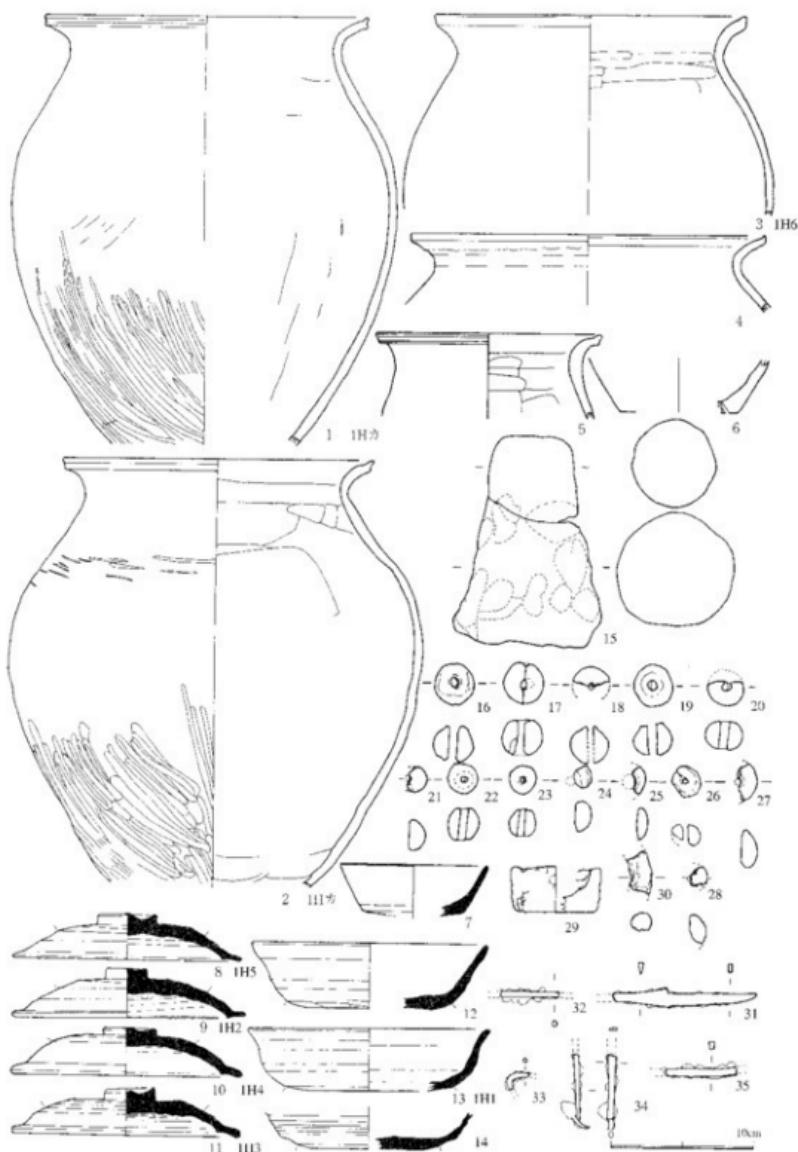


第5図 1号住居跡カマド

検出されていない。P3は貯蔵穴と思われカマドの右側に位置する。P1の平面形は円形を呈し、径60cm、深さ70cm程、P2平面形は円形を呈し、径50cm、深さ74cm程、P3の平面形は楕円形を呈し、長径160cm、短径87cm、深さ29cm程を測る。

カマドは北壁の中央からやや東寄りに位置する。本住居跡の下端からカマドの下端まで35cm程壁外に掘り込んで構築し、緩やかに傾斜しながら立ち上がる。床面と確認面に於ける煙道部の上端との角度は40°程を測る。天井部は崩落している。火床部は楕円形で長径60cm、短径45cm、深さ4~7cmを測る。袖は2本とも壁面から直角方向に付され、緩やかに内湾している。長さはいずれも40cm程であり、先端部の開きは50cm程を測る。袖は床面に暗褐色土を敷き固めその上に白色粘土で構築している。外壁は山砂と白色粘土との混合土であり、内壁はスサ混じりの粘土で構築され、強く熱を受け赤褐色に変化している。カマド内の充填土は8種類に分けられる。下位に褐色の灰その上に天井崩落土の赤褐色土、山砂・焼土を含む暗褐色土があり、白色山砂、さらにしまりのあるやや砂質土ぎみの暗褐色土が多量に充填される。

出土遺物は、カマドからNo.1・2土師器壺、また左袖の外壁横にNo.15土製支脚、貯蔵穴と思われるP3よりNo.3土師器壺の破片とNo.8・10須志器蓋が出土している。その他覆土中及び床面上より壺、瓶、壺、蓋、土玉、手捏、刀子、不明土製品、不明鉄製品等が出土している。その状況は完形のものもあるがほとんどが破片である。掲載遺物は35点である。



第6図 1号住居跡出土遺物

出土遺物

1～5は土師器甕で、いずれも欠損部はあるが、1・2では底部を除きほぼ器形が判る。3は口縁より胴部上半にかけての大破片で、4・5は口縁部のみである。1の口径は22.7cm、2は21.8cm、3は22cm、4は24.8cm、5は16.1cmを測る。1～3の胴部は緩やかに内湾し、胴部上半部に最大径を有す。1～5の口縁はくの字に外反して開き、口唇はつまみあげるよう立つ。口縁は内外面共ヨコナデを施している。胴部上半は不定方向のナデ、1・2の胴部下半は継維のヘラミガキが施されている。1～3・5は内面顎部に横方向のヘラケズリが施されている。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を多く含み焼成は良好である。色調はにぶい褐色である。

6は土師器甕の破片で、底径8.2cmを測る。体部はやや傾斜ぎみに立ち上がる。内外面とも不定方向のナデが施されている。底部の穿孔はへら状工具により鋭く行われている。胎土は長石を多く含み、焼成は良好であり、色調はにぶい褐色である。

7は須恵器で、形態は高壺か台付皿かと思われる。口径10.4cmを測る。内外面共ヨコナデが施されている。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を多く含み、焼成は還元が不良であり、色調は灰色で、底部にかけて橙色をしている。

8～11は須恵器蓋で、8は完形である。8は口径15.8cm、器高3.3cm、9は口径16.5cm、器高3.5cm、10は口径16.3cm、器高3.3cm、11は口径16.1cm、器高3.4cmを測る。いずれも天井は緩やかに内湾し、端部には返しを有す。つまみは扁平で回転ヘラケズリの後付される。体部は内外面共にロクロ痕。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は8・10が灰白色、9・11が青灰色である。

12～14は須恵器坏で、いずれも破損している。12は口径16.7cm、底径8.8cm、器高4.6cm、13は口径は17cm、底径11.9cm、器高4.4cm、14は底径7.8cmを測る。12の体部は直線的に開き、13は外反ぎみに開く。体部は内外面ともロクロ痕が残り、ヨコナデが施されている。いずれも底部は平底で回転ヘラ切りが行われるもので、12・14はその後に手持ちヘラケズリ、13は回転ヘラケズリが施される。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は12が灰色、13・14が灰白色である。

15は土製支脚で器高は14.7cmを測る。器形は先細りの円柱状を呈し全面に指の圧痕がある。16～28は土玉で、16・19・22・23は完形である。16・17・20・21・27は孔部が僅かに窪んだ球形、18・23は孔部が突出した球形、19・22・26は孔部が平坦な球形を呈する。16の最大径2.8cm、高さ2.5cm、孔径0.6cm、17は2.0cm、2.5cm、0.5cm、18は2.2cm、2.2cm、0.4cm、19は3.0cm、2.3cm、0.6cm、20は2.6cm、1.9cm、0.5cm、21は高さ2.1cm、22は最大径2.1cm、高さ2.2cm、孔径0.5cm、23は2.0cm、1.9cm、0.4cm、24は高さ2.1cm、26は最大径2.1cm、高さ1.5cm、孔径0.3cm、27は高さ2.7cmを測る。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は褐色であるが、19・22は赤みをおびている。

29は手捏である。底径は5.3cmを測る。底部は平底で、体部は直立ぎみになり、指の圧痕が認められる。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黄褐色で、内面は黒斑が見られる。

30は土製品であるが器種は不明である。器形は円柱状を呈し、やや湾曲している。径1.4cmを測り、両端は欠損している。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は褐色である。

31～35は鉄製品で、32～35の器種は不明である。31は刀子で切先が欠損している。断面は三角形で、長さ9.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。32の器形は円筒状を呈し、長さ5.2cm、径0.4cmを測る。33の器形は湾曲していて、断面は円形である。径は0.3cmを測る。34の器形は板状で、一端は欠損し、もう一端には湾曲した鉄がさびで結合している。断面は長方形を呈し、長さ5.3cm、幅0.4～0.6cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。35の器形は板状で中は空洞である。断面は長方形を呈し、長さ5.0cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。

2号住居跡（第7・8・9図 図版3・8-1）

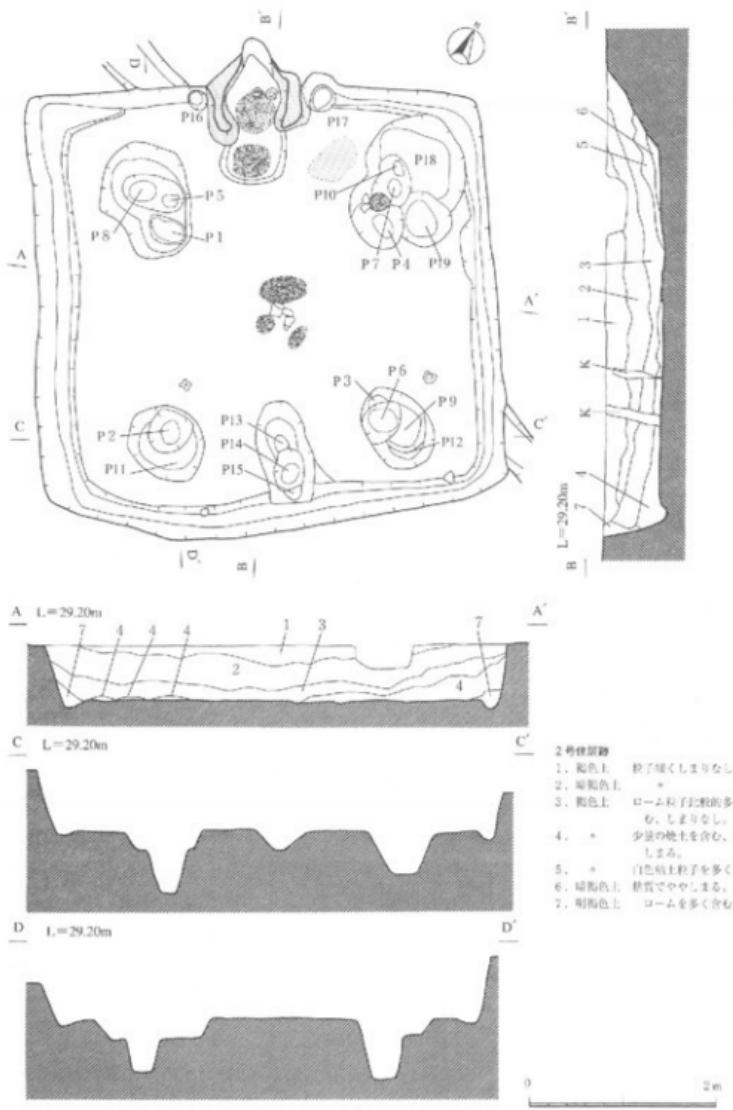
本住居跡は調査区の東側B-3・C-3グリッドに於いて検出された。主軸はN-28°-Wを指向し、平面形は方形を呈する。規模は長軸（主軸）5.35m、短軸4.90m程を測る。

覆土は上層の褐色土、中層の暗褐色土、下層の褐色土を主体とし、色、しまり、粘質、ローム粒子、焼土、粘土粒子の含み具合から7層に分層される。レンズ状の自然堆積である。

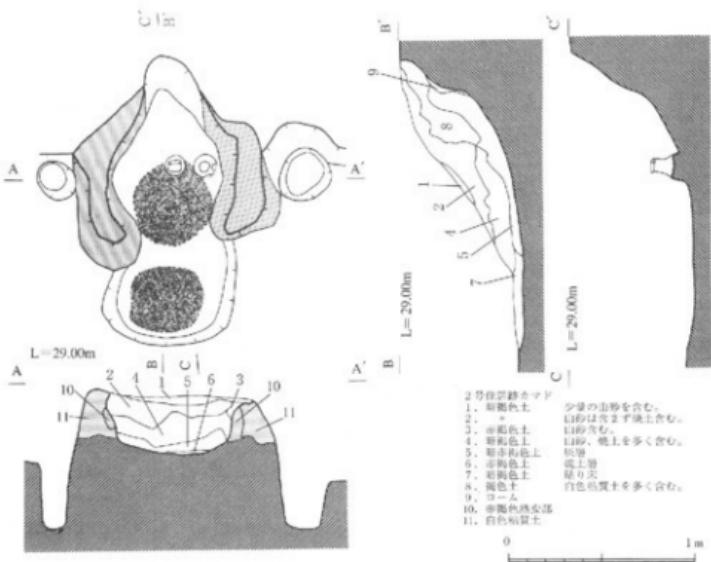
壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は60～68cmを測る。壁溝はカマドを中心とする北壁の一部を除き全周し、幅10～18cm、深さ3～10cmを測る。床面はほぼ平坦であり、全体に良く踏み固められている。床面の中央に焼土が検出されているが、火災に遭ったものとは考えられず、炉的な性格の可能性があると思われる。

ピットは19基検出されている。床面の下から本住居跡増築前の住居の柱穴跡と思われるピットが検出されたが、増築前の壁溝等の明らかな跡は確認できなかった。ピットの深さは本住居跡の床面から測った。P1は59cm、P2は63cm、P3は47cm、P4は53cm、P5は64cm、P6は63cm、P7は62cm、P8は55cm、P9は43cm、P10は60cm、P11は18cm、P12は25cm、P13は18cm、P14は30cm、P15は18cm、P16は27cm、P17は31cm程を測る。初期の住居跡の主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本と思われる。1回目の増築で主柱穴をP5・P6・P7に移し、北・北東・南東に増築したものと思われる。次にまた北と南東、さらに北西への増築のため、主柱穴をP8・P9・P10に移設したと思われる。この事から本住居跡は最低でも2回は増築を行ったと考えられる。P11・P12は最終的に南と南西に増築した時の主柱穴跡の可能性を指摘できるが、他の主柱穴跡と較べて深さが浅い事から定かではない。P13～P15は柱穴の跡と思われ、やはり増築に伴い外側に移ったと考えられる。カマド両袖脇のP16とP17も柱穴と思われる。北東隅角のP18とP19は貯蔵穴と思われる。P18の平面形は不整圓丸長方形で、長軸75cm、短軸60cm、深さ26cm程を測る。P19の平面形は梢円形で、長径40cm、短径33cm、深さ31cm程を測る。

カマドは北壁のほぼ中央に位置する。本住居跡の下端からカマドの下端まで45cm程壁外に掘り込んで構築し、段を有して傾斜ぎみに立ち上がる。床面とカマドの下端との角度は23°、カマドの下端と確認面に於ける煙道部の上端との角度は65°程を測る。天井部は崩落している。



第7図 2号住居跡



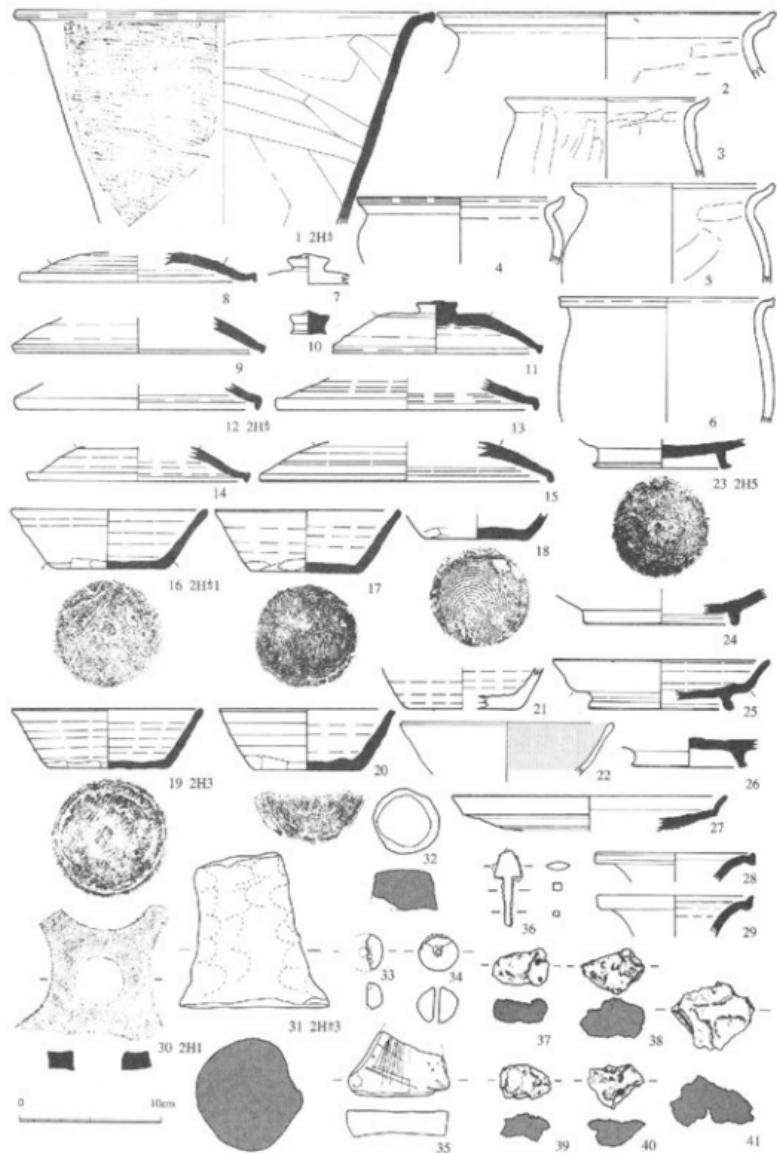
第8図 2号住居跡カマド

火床部は2ヵ所あり、北側は円形で径45cm程を測る。南側は楕円形で長径43cm、短径35cmを測る。南側の火床部は貼り床の下より検出された。このことから住居の増築とともにないカマドも南側から北側に移設したものと思われる。袖は2本とも壁面から直角方向に付され、先端は内湾している。右袖の長さは40cm程、左袖は50cm程であり、先端部の開きは40cm程を測る。袖は白色粘質土で構築される。内壁はスサ混じりの粘土で構築され、強く熱を受け赤褐色に変化している。カマドの充填土は7種類に分けられる。下位に暗赤褐色の灰、その上に山砂・焼土を多く含む暗褐色土と撻道部側に白色粘質土を多く含む褐色土があり、さらにその上に焼土を含む暗褐色土、少量の山砂を含む暗褐色土がある。

出土遺物は、カマド燃焼部中央からNo.31土製支脚が出土し、特筆すべきものとして支脚の頂部に土師器の土器片が重なって出土した事が挙げられる。又No.16須恵器坏が支脚の右から体部が一部欠損した状態で出土した。その他覆土中及び床面直上より壺、蓋、高台付壺、壺、台付壺、瓶、甌、土玉、砥石、鐵、不明土製品、不明鐵製品等が出土している。その状況は完形のものもあるが大半が破片である。掲載遺物は41点である。

出土遺物

1～6は土師器の壺で、いずれも欠損し、2・4は口縁部のみである。1の口径は29.7cm、



第9図 2号住居跡出土遺物

2の口径は24cm、3の口径は14.2cm、4の口径は14.6cm、5の口径は14.3cm、6の口径は15.1cmを測る。1の口縁は外反して開き、内外面共ヨコナデを施している。胴部外面は平行タタキ内面は不定方向のナデが施されている。2～6の口縁はくの字に外反して開き、口唇はつまみあげるように立つ。口縁は内外面共ヨコナデを施している。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を多く含み、焼成は良好である。1・2・4の色調はにぶい褐色、3・5・6は赤褐色で、3～6は内面が黒色である。

7は須恵器を模倣した上師器の蓋で、つまみの部分である。内面は黒色処理を施している。焼成は良好で、色調はにぶい褐色である。

8～15は須恵器蓋である。10はつまみ部分である。8の口径は16.6cm、9は17.4cm、11は口径14.8cm、器高3.7cm、12の口径は17.0cm、13は18.4cm、14は16.6cm、15は20.8cmを測る。体部は緩やかに内湾し、先端部で折れる。返しはない。内外面共ロクロ痕が残り、8と15は回転ヘラケズリが施されている。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は8～10・14は灰色で、11・13は灰白色、12と15は暗灰色である。

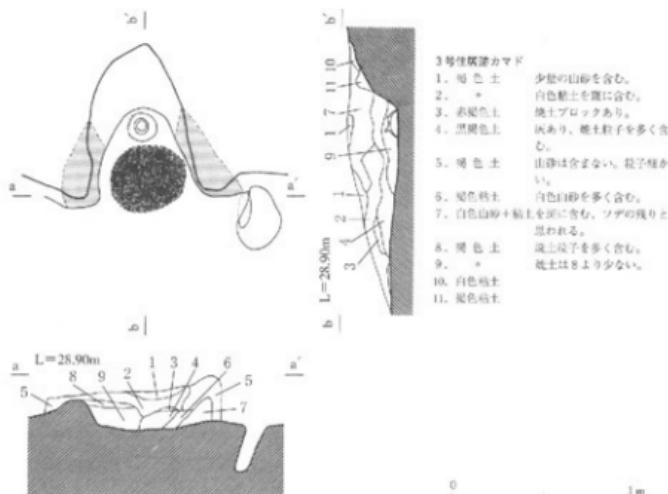
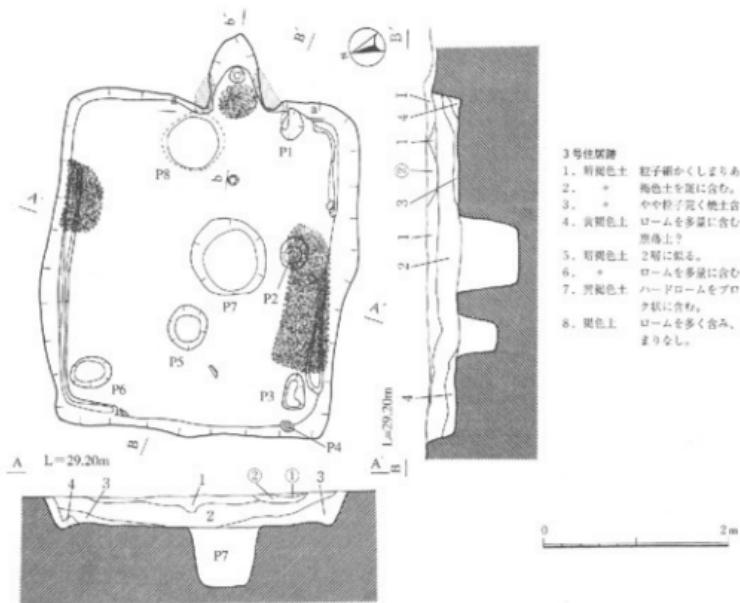
16～20は須恵器壺で、いずれも欠損部分があり、18は底部破片である。16の口径は13.6cm、底径8.3cm、器高4.1cm、17は口径12.8cm、底径7.5cm、器高4.4cm、18は底径7.2cm、19は口径13.4cm、底径8.4cm、器高4.1cm、20は口径12.3cm、底径7.5cm、器高4.4cmを測る。いずれも同様の器形で、底部は平底である。体部は直線的に立ち、先端で僅かに外反する。体部の内外面共ロクロ痕が残り、ヨコナデが施されている。16・17・19の底部と胴部下端は手持ちヘラケズリである。18の底部は回転糸切りで胴部下端に手持ちヘラケズリが施される。20の底部は回転ヘラ切りで、胴部下端は手持ちヘラケズリである。胎土は長石、石英、雲母等砂粒を含み、焼成は良好である。色調は16が暗灰色、17・19・20は灰色、18は灰白色である。

21と22は上師器壺の破片である。21の底径は7.9cm、22の口径は15cmを測る。21の底部は平底で、直線的に立ち上がる。22は内湾ぎみに開く。体部は内外面共ロクロ痕が残り、ヨコナデが施されている。22の内面は黒色処理である。胎土は長石等砂粒を含み、焼成は良好である。色調は21がにぶい橙色、22は黄褐色である。

23～26は須恵器高台付壺の底部破片である。23の底径は9.7cm、24は10.8cm、25の口径は15.2cm、底径10.2cm、器高3.5cm、26の底径は8.1cmを測る。胴部内外面共ナデが施されている23の胴部内面はロクロ痕が残り、底部は回転ヘラケズリの後高台がハの字に付される。25の体部は外反して開く。24～26の底部はナデの後、24は垂直に、25・26はハの字に付される。胎土はいずれも長石を多く含み、焼成は良好である。色調は23と24は暗灰色、25は灰白色、26は灰色である。

27は台付皿の破片と思われる。口径は21.4cmを測る。体部は緩やかに内湾し、稜を有した後さらに外反する。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。

28・29は須恵器瓶である。28の口径は11.2cm、29の口径は11cmを測る。口縁部は大きく外反して開き、口唇部はつまみあげるように立つ。口縁部内外面共ナデが施されている。胎土は



第10図 3号住居跡・カマド

砂粒を含み、焼成は良好である。色調は28が灰白色、29は灰色である。

30は瓶の底部破片である。底部の中央に円形、四方に長椭円形と思われる穴がへら状工具により鋭く穿たれている。また穿孔位置の目安と思われる沈線が引かれている。内面はナゲが施されている。胎土は長石を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。

31～34は土製品である。31は支脚、32は不明円盤状土製品、33・34は土玉である。

35は凝灰岩製の砥石で、基部は欠損する。表面に縦状の傷が残る。

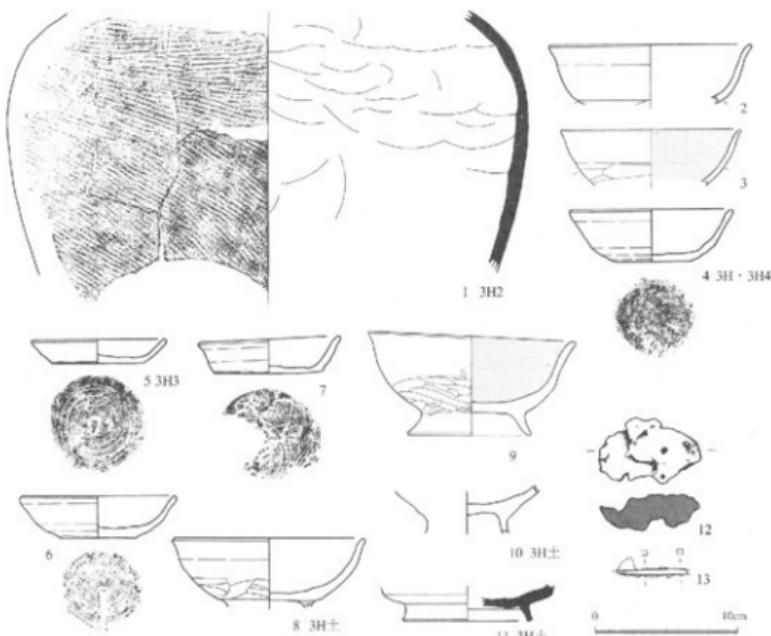
36は鉄製の三角鐵である。茎は欠損し頭の形態は不明である。

37～41は鉄滓である。いずれも鉄滓であるが錆化が少なく質量がある。

3号住居跡（第10・11図、図版4・8）

本住居跡は調査区西側A-3、A-4、B-3グリッドに於いて2号道状遺構の下から検出された。主軸はN-113°-Eを指向し、平面形は長方形を呈する。規模は長軸（主軸）3.50m、短軸2.85m程を測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、色調、しまり、粒子、褐色土・焼土の含み具合から4層に分層



第11図 3号住居跡出土遺物

される。堆積状況はレンズ状の自然堆積である。しかしながら、北壁傍と南壁傍に焼土の分布がみられ、本住居跡は火災に遭ったものと思われる。

壁はやや傾斜ぎみに立ち上がり、壁高は24~44cmを測る。壁溝は全周せず、北壁と南壁に部分的に検出され、幅3~12cm、深さ3~7cmを測る。床面はほぼ平坦であり、全体に良く踏み固められている。ピットは8基が検出されている。P1~P6は柱穴と思われる。P1の平面形は不整橢円形を呈し、長径37cm、短径22cm、深さ25cm程、P2の平面形は円形を呈し、径31cm、深さ22cm程、P3の平面形は不整橢円形を呈し、長径39cm、短径23cm、深さ16cm程、P4の平面形は橢円形を呈し、長径15cm、短径10cm、深さ11cm程、P5の平面形は円形を呈し、径45cm、深さ40cm程、P6の平面形は橢円形を呈し、長径45cm、短径34cm、深さ7cm程を測る。P7は土坑状で平面形は円形を呈し、径85cm、深さ63cm程を測る。本土坑の覆土はロームを多く含むしまりのない褐色土、ハードロームをブロック状に含む黄褐色土、粒子繩かくしまりのある暗褐色上の3層を主体とし、壁際に埠の崩落土であるロームを多量に含む暗褐色土堆積が観察される。本土坑は住居の覆土は切らず、床面より掘り込まれており明らかに住居に伴うものと思われる。P8は平面形が円形を呈する袋状の土坑である。径55cm、深さ55cm程を測る。断面図で示せなかったが、本土坑最上部には本住居跡の貼り床面が確認されており、本住居跡よりも古い事を示唆している。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。本住居跡の下端からカマドの下端まで50cm程壁外に掘り込んで構築され、段を有し傾斜しながら立ち上がる。カマドの下端と1段目との角度は60°程、1段目と2段目との角度は30°程、2段目と確認面に於ける上端との角度は15°程を測る。天井部は崩落している。火床部は橢円形で長径42cm、短径35cm、深さ5cm程を測る。カマドは壁面よりほとんど外に突出しており、袖は不明確である。カマドの充填土は褐色土、白色粘土等、色調、しまり、山砂・焼土・粘土の含み具合から11層に分層される。

出土遺物は、カマド内からNo.9高台付壺が支脚として利用された伏せた状況で出土し、No.5皿がカマド前面の床直上で出土している。またNo.11須恵器高台付壺の底部破片がP8内より出土している。その他覆土中及び床面直上より壺、壺、高台付壺、皿、鉄滓、棒状鉄製品等が出土している。その状況は完形のものもあるがほとんどが破片である。揭露遺物は13点である。

出土遺物

1は須恵器壺で、胴部の大破片である。胴部外面に平行タタキが施され、内面にはアテ具痕が残る。胎土は長石、石英、雲母等砂粒が多く含む。焼成は二次焼成をうけ酸化されている。色調は褐色である。

2~4は土師器壺で、2・3は破片、4は一部破損しているがほぼ完形である。2は口径14.3cm、3は12.8cm、4は口径11.3cm、底径5.4cm、器高3.7cmを測る。いずれも胴部は緩やかに内湾して、先端は外反して開く。2は内外面共ヨコナデ、外面下半にヘラケズリが施さ

れている。3の内面はヘラミガキ後黒色処理、外面は上半がヨコナデ、下半は手持ちヘラケズリが施されている。4は平底で回転糸切りである。内外面共ロクロ痕が残り、ヨコナデが施されている。2の胎土は雲母を多く含み、3・4は砂粒を含む。焼成はいずれも良好で、色調は褐色である。2の内面は赤褐色である。

5～7は土師器皿である。5は口径9.3cm、底径6.5cm、器高1.7cm、6は口径10.9cm、底径5.2cm、器高3.0cm、7は口径9.8cm、底径7.6cm、器高2.5cmを測る。5の体部は緩やかに内湾して開き、底は平底で回転ヘラ切りである。6の体部も緩やかに内湾して開き、底は平底で回転糸切りである。7は直線ぎみに立ち上がり外反して開き、底は平底で回転糸切りである。いずれも内外面共ヨコナデが施される。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は褐色である。

8～10は高台付坏で8は高台と一部が破損し、9も一部破損している。10は底部の破片である。8は口径13.2cm、9は口径14.5cm、底径8.6cm、器高7.0cmを測る。8・9の崩部は内湾して立ち上り、先端で外反して開く。内面はヘラミガキ、外面上半はヨコナデ、下半は手持ちヘラケズリが施されている。9は内面黒色処理も施されている。10は内外面共ナデが施されている。いずれも高台はハの字に付される。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は褐色である。

11は須恵器高台付坏の底部破片である。底径は9.2cmを測る。内外面共ヨコナデ、底部は回転ヘラケズリが施されている。高台がハの字に付される。胎土は長石、石英等砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。

12は鉄滓で縦7.2cm、横4.5cm、厚さ2.3cmを測る。13は棒状の鉄製品で、器形は円筒状である。長さ5.1cm、径0.4cmを測る。

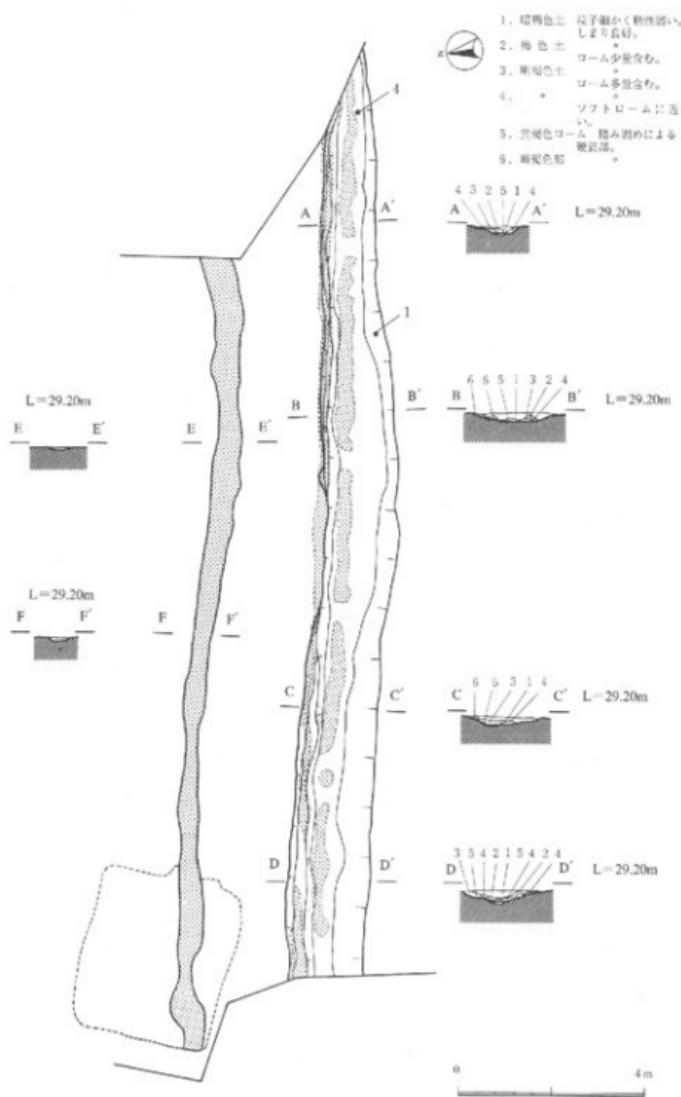
第2節 道状遺構（第12・13図・図版5）

本遺跡に於いて道状遺構は調査区中央やや南側に2条検出されている。この2条は1.70～2.10mの間隔をあけて、東西には平行に延びている。2号道状遺構は3号住居跡と重複して検出された。

1号道状遺構

本遺構はA-4グリッドからC-4グリッドに於いて検出された。両端が調査区域外に及ぶため、その延長上の調査はできなかった。走行方向はN-70°-Wで東西には直線に延びている。本遺構の土層断面の觀察は任意の4カ所で行った。4カ所共、北側から中央にかけての部分にロームを多量に含み粒子細かく粘性の弱いしまりの良い明褐色土、南側から中央にかけての部分にソフトロームに近い明褐色土があり、上層には粒子細かく粘性の弱いしまりの良い暗褐色土が堆積し、所々に粒子細かく粘性の弱いしまりの良い褐色土が検出される。

本遺構は掘り込み、土層、硬質部の状況から南北に2条の道状遺構の重複である事が確認された。おそらくは改修による掘り直しだろう。南側の遺構の掘り込みの幅は70～160cm、確認面からの深さは8～35cmを測る。断面形の形状は皿状である。黄褐色ローム上の硬質部が中央やや北側に断続的に検出される。



第12図 道 状 遺 構

北側の掘り込みの幅は20~50cm、深さは2~9cmを測る。断面形の形状はやはり皿状と思われる。

暗褐色土の硬質部が北側立ち上がり部に帯状に検出された。

土壙断面により、北側の道状遺構の硬質部が南側の道状遺構に切られている事が解る。この事から本遺構は、北側の道の南側をさらに深く掘り込み、新たに道を構築したと考えられる。出土遺物は蓋、高台付坏、甕が破片で出土している。掲載遺物は4点である。

出土遺物

1は須恵器蓋で一部破損している。口径15.6cm、器高3.8cmを測る。天井は緩やかに内湾し端部に返しはない。つまみは宝珠形で回転ヘラケズリの後付される。体部は内外面共にロクロ痕がある。胎土は長石等砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。

2は須恵器高台付坏で底部破片である。底径8.1cm、器高2.7cmを測る。内外面共ロクロ痕が残り、ナデが施されている。高台はハの字に付される。胎土は石英等砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰白色である。

3・4は須恵器甕の脇部破片である。3の外面には格子状タタキが施され、内面には青海波模様のアテ具痕が残る。4の外面は平行タタキが施され、内面にアテ具痕が残る。3の胎土は長石を含む。両方とも焼成は良好で、色調は3が暗灰色、4が灰色である。

2号道状遺構

本遺構はA-3グリッドからC-4グリッドに於いて検出された。両端は調査区域外に及んでいる。走行方向はN-70°-Wで東西にはほぼ直線に延びている。本遺構は確認面の段階で掘り込みは確認されておらず、黒色の硬質部の広がりとして捉えられたものである。硬質部の幅は25~70cmを測る。本遺構は3号住居跡の覆土を切って検出されており、3号住居跡より新しい遺構である。出土遺物はいずれも細片のため掲載はしていない。

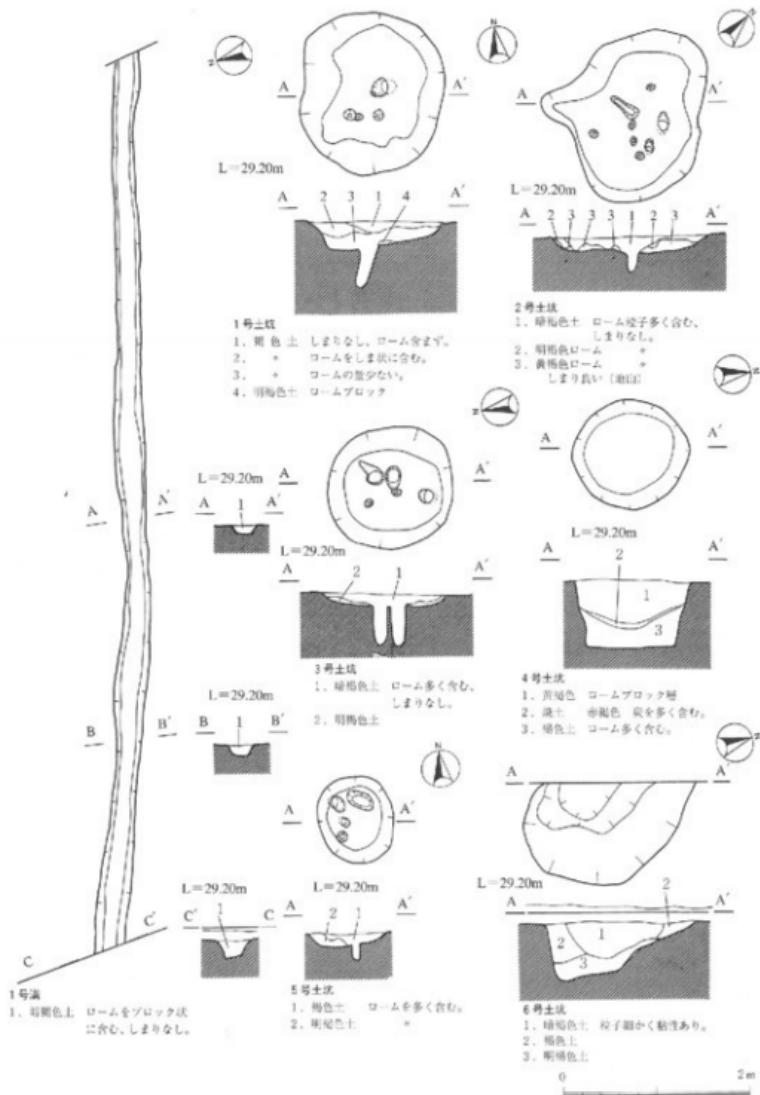
第3節 溝・土坑（第14図 図版6）

本遺跡に於いて溝は1条、土坑は6基検出されている。1号溝は調査区中央や北側を東西に走り、2号住居跡に重複している。1号土坑は調査区南、5・6号土坑は調査区南西に於いて検出される。又2号住居跡周辺に2・3・4号土坑が偏在して検出された。

1号溝 本遺構はA-3グリッドから、C-3グリッドに於いて検出された。両端は調査区域外に及びその先は不明である。走行方向はN-75°-Wで東西にはほぼ直線に延びている。断面形は逆台形を呈する。確認面に於ける幅は45~70cmを測る。深さは19~34cmを測り、



第13図 1号道状遺構出土遺物



第14図 溝・土坑

西側に向かうにつれて深くなる。覆土はロームが主体でしまりが良好な暗褐色土が堆積している。上層の観察から、2号住居跡の覆土を切っている事が解り、2号住居跡より新しい事が判明している。

1号土坑 本遺構はB-4グリッドに於いて検出された。平面形は梢円形を呈し、断面形はロート状を呈す。規模は長径170cm、短径150cm、深さ30cm程を測る。木根跡が中央と南側に検出され、さらに深さ30cm以上を測る。覆土は色調、しまり、ロームの含み具合から4層に分層される。

2号土坑 本遺構はB-3・4、C-3・4グリッドに於いて検出された。平面形は不整梢円形を呈し、断面形はロート状を呈す。規模は長径190cm、短径170cm、深さ20cm程を測る。木根跡が中央付近に検出され、さらに深さ20cm以上を測る。覆土は色調、しまり、ローム粒子の含み具合から3層に分層される。

3号土坑 本遺構はB-3グリッドに於いて検出され、平面形は円形を呈し、断面形はロート状を呈す。規模は径140cm、深さ12cm程を測る。木根跡が北東と南側に検出され、さらに深さ10cm以上を測る。覆土はロームを多く含む暗褐色土とソフトロームの2層に分層される。

4号土坑 本遺構はB-3グリッドに於いて検出され、平面形は円形を呈し、断面形は逆台形を呈す。規模は径120cm、深さ70cm程を測る。覆土は3層に分層される。下層にロームを多く含む褐色土、その上に赤褐色で炭を多く含む焼土層があり、さらに黄褐色のロームブロック層が堆積している。壁はやや傾斜ぎみに立ち上がる。

5号土坑 本遺構はA-4グリッドに於いて検出され、平面形は梢円形を呈し、断面形はロート状を呈す。規模は長径95cm、短径80cm、深さ15cm程を測る。木根跡が北西側に検出され、さらに深さ15cm以上を測る。覆土は粘性がある暗褐色土とロームの混入している明褐色土の2層に分層される。

6号土坑 本遺構はA-4グリッドに於いて検出されたが、調査区域外に及ぶため全体の性格は不明である。深さは45cm程を測る。壁の北側は緩やかな傾斜で立ち上がり、南側はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層される。下層にロームを多く含む明褐色土、その上にしまりのある褐色土と明褐色土を斑に含むしまりのある暗褐色土が堆積している。

出土遺物は1・2・3・4号土坑から土器が出土したがいずれも細片のため、掲載はしていない。

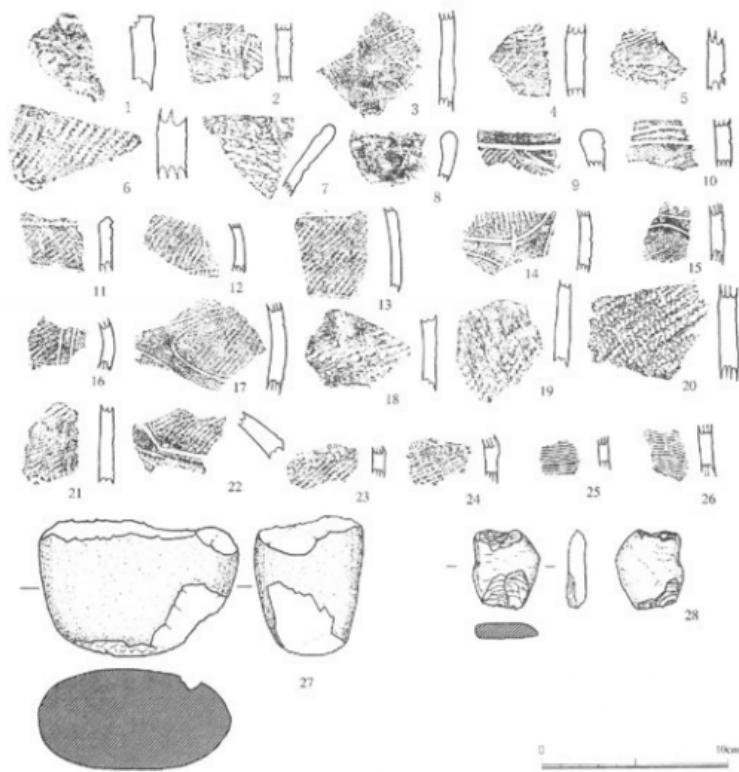
第4節 遺構外出土遺物（第15図）

遺構に伴わない遺物31点について、本節に於て掲載した。

1~22は縄文土器である。

1は前期後半十三菩提式土器で、口縁部の細片である。胎土中に陳・雲母を多く含む。器面には爪形の連続刺突を行った浮線が僅かに残る。

2~5は中期前半下小野式土器である。2・3・5で無節、4で単節の縄文が施文され、横



第15図 遺構外出土遺物

8は内湾する口縁部の破片である。無紋帶となるもので中期終末より後期にかかる資料であろう。

方向のS字状の結節紋が施文される。いずれも焼成は良好である。

6は厚手の縄文上器片である。中期後半の遺物であろう。器面には単節RLの縄文が施文される。

7は外反する口縁部の破片で、器面には単節縄文を施文した後に斜め方向の沈線が施文される。縄文後期の所産であろう。

9は縄文後期加曾利B II式土器の口縁部細片である。内傾する口縁部の直下に沈線が廻る。また、単節縄文を施文後磨り消しが見られる。

10は2本の沈線が描かれるが平行沈線ではなく1本ずつ描いている。器面は斜方向のヘラ削りが見られる。縄文後期の所産であろう。

11～13は同一個体の破片であろう。やや薄手で単節R Lの細かな縄文を地文にし沈線による区画帯が描かれる。また、11・12には沈線に沿って刻み目状の刺突が加わる。加曾利B II～B III式の所産であろう。

14～17は同一個体の破片であろう。薄手で胎土は緻密である。曲線と直線の組み合わせによる区画帯が描かれ、単節L Rの縄文が施文される。区画の外は磨かれ縄文は磨り消される。加曾利B IIもしくは曾谷式に比定される。

18～21は縄文のみの施文が行われる細片である。いずれも単節のL Rである。縄文後期の所産であろう。形式については不明である。

22は深鉢の肩部の細片である。沈線による区画帯の内部にはL Rの単節縄文が施文される。加曾利B II式の所産であろう。

23～26は弥生土器である。

23・24は細縄文を施文するもので、薄手で胎土中に細かな砂粒を多く含む。後期十王台式に比定されよう。

25・26は横方向の櫛描文が施文される。胎土焼成は23・24と同様で、後期十王台式に比定される。

27・28は石器である。2点のみの出土であったが、いずれも縄文時代の所産と考えられる。

27は安山岩の磨り石で2分の1を欠損する。上下側面共に良く使われ、磨滅している。

28はチャートの楔形石器である。扁平な円錐の両端に両面からの打撃による刃部を作出している。側縁はいずれも自然面を残す。

29～31は歴史時代の所産である。

29は土師器壺の口縁部破片である。口縁部は頸部でくの字に外反した後、つまみあげるよう立つ。胎土には多量の白色長石・雲母を含むもので、いわゆる常総型の壺である。外面胴部の磨きは確認できない。8世紀以降の所産であろう。

30は須恵器長頸瓶の頸部破片である。口縁部・胴下半部は欠損している。薄手で、頸部はやや太く器面には自然釉が被る。内外共にロクロ擦痕を残したまま胎土は緻密で焼成も良好である。9世紀以降の所産と考えられる。

31は須恵器蓋である。天井部は丸みを持ち中央につまみが付される。つまみは円柱状で、中央部が僅かに突出する。天井部は回転ヘラケズリによる整形を行っている。端部は欠損しているが、おそらく返しを持たない形態であろう。8世紀以降の所産と考えられる。

以上、遺構外出土遺物について掲載した。また、住居跡出土の遺物であっても遺構の年代と異なる遺物については本節において載せた。

表2 出土遺物編年表

1 号 住	7	13	11	9	8	10	12	14	15	27	13	25	24	12	8	14	11	2	1
	2	1	19	16	17	20	23	26	28	3	15	13	9	12	8	14	11	2	1
2 号 住	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
3 号 住	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38

第7章 まとめ

遺構の年代観を与え、調査の成果についてまとめを行う。

検出された住居跡は3軒で、各住居は重複もなく良好な遺存状況である。遺物は各住居から良好なセットで検出されており、明瞭な時期差を確認できる。1号住居跡はやや形の張る常総型の壺2個体・体部が丸みを帯びる須恵器の壺3点・返しを有する須恵器蓋4点が出土し、土師器の壺を持たない点が特徴となる。これらの遺物は茨城県南地域に於いては、柴崎II遺跡2区9A・52・54号住居跡出土の遺物と共通するもので、8世紀前半の所産と考えられる。

2号住居跡は、土師器の小型の壺が主体になりこれに須恵器の壺が伴う。また、体部が大きく外反して聞く須恵器の壺、高台付の壺と盤が伴う。蓋は返しを有さないもののみとなる。県南地域に於いては、柴崎II遺跡2区43・118・132号住居跡、西郷遺跡9号住居跡、思川遺跡6・10号住居跡で同様の資料が見られる。9世紀前半の年代観が与えられよう。

3号住居跡は小型皿を主体にする点が特徴となる。やや時間的にさかのほる可能性のある内面を黒色処理した壺が、カマド内の支脚として設置された状態で検出されている。また、須恵器高台付壺が住居跡の床下に位置する土坑より出土しているが、住居よりも古い遺物と判断され、土坑が住居より古い遺構であることが判る。小型皿の県南地域における類例としては、西郷遺跡29号住居跡、二の宮遺跡1号住居跡、同147号土坑などがあるが、全体に資料は少ない。千葉県北部に於いては、10世紀後半から末にかけ出現することが知られるが、浅井哲也によれば茨城県南部の編年で11世紀前半から中葉に含められている。ここではやや幅を持たせ、10世紀末より11世紀中葉の年代観を与える。

1号道状遺構は出土遺物の蓋から、2号住居跡同様9世紀前葉の年代観が与えられる。

2号道状遺構の年代は出土遺物がなく不明であるが、3号住居跡との重複関係からそれより新しい事が判明している。本遺構は、1号道状遺構と形状が似ており、また走行方向がほぼ平行である事から、3号住居跡より後の平安時代後期に近い頃から1号道状遺構に取り替わって使用されたものと推測される。

1号溝からも年代を判断できる資料の出土はなかったが、覆土の状況より判断して近世以降現代に近い遺構の可能性が高い。

1・2・3・5号土坑は底部に樹木の根を抜き取った痕跡が認められる。抜き取り濡れた根の形状より松の根と判断された。又地元の人からこの辺りはかつて松林であったとの話を得ている。推測の域を脱し得ないが、太平洋戦争中に海軍の飛行機に使用された松根油採取など、抜根の跡の可能性が高い。4・6号土坑の年代は不明である。

<参考引用文献>

浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)」『研究ノート』創刊号

平成3年度 茨城県教育財團

KOIKEDAIRA SITE

ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION REPORT

OUTLINE OF THE INVESTIGATION

KOIKEDAIRA SITE is located in Aza Koikedaira, Oaza Yagimaki, Tamatsukuri town, Namekata, district, Ibaraki prefecture. The site is on a plateau which commands Kasumigaura and Mt. Tsukuba, and the scenery there is quite beautiful. The excavation was done by the Board of Investigation on Buried Cultural Properties of Tamatsukuri town prior to widening out the town road No. 2427 from March 10 to 27, 1993. The area of excavation was 600 m².

EXCAVATED RUINS

PERIOD	TYPE	NUMBER
NARA	Pit Dwelling	1
HEIAN	Pit Dwelling	2
	Road	2
MODERN	Pit	4
UNKNOWN	Pit	2
	Ditch	1

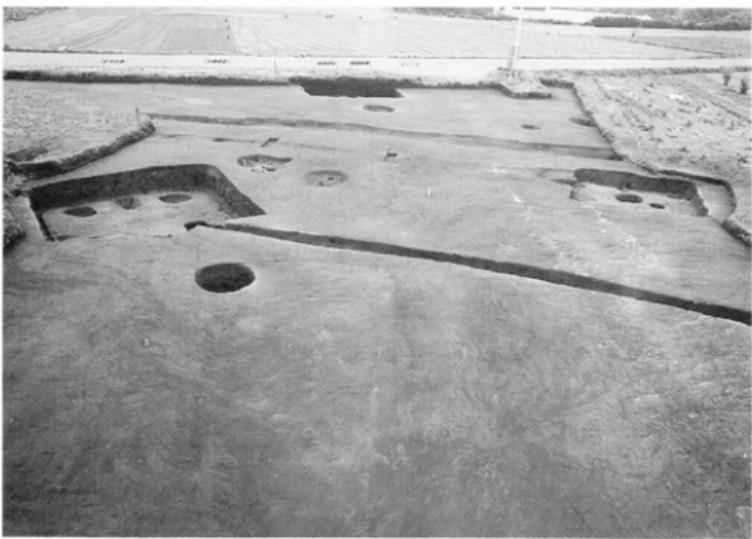
EXCAVATED REMAINS

PERIOD	TYPE	REMAINS
NARA	Haji Ware	Pot
	Sue Ware	Bowl, Cover
	Clay Objects	Spherical Clay Weight, Clay Vessel Support
HEIAN	Haji Ware	Pot, Bowl, Cover,
	Sue Ware	Pot, Steaming Vessel, Bowl, Bowl with Pedestal, Large Shallow Dish
	Clay Objects	Spherical Clay Weight, Clay Vessel Support

写 真 図 版



1. 遺跡 確認状況



2. 遺跡全景



1. 1号住居跡



2. 同セクション



3. 同カマド



4. 同遺物出土状況



5. 同遺物出土状況



1. 2号住居跡



2. 同セクションA-A'



3. 同カマド



4. 同遺物出土状況



5. 同遺物出土状況



1. 3号住居跡



2. 同セクション



3. 同カマド



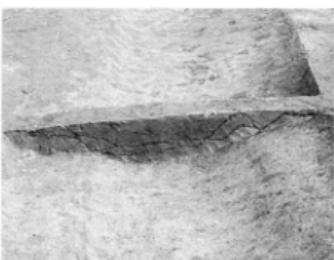
4. 同遺物出土状況



5. 同遺物出土状況



1. 1号道状遺構



2. 同セクションD-D'



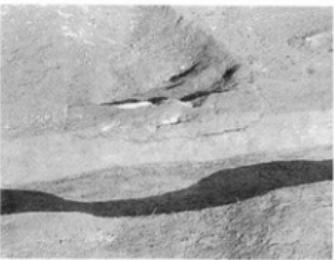
3. 同遺物出土状況



4. 2号道状遺構



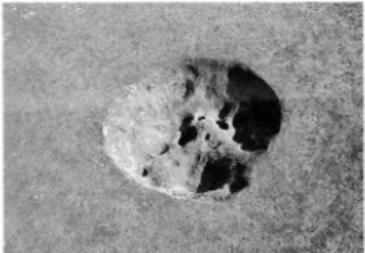
5. 同セクションE-E'



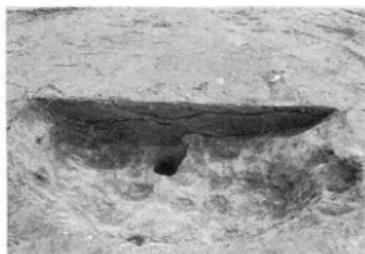
6. 同セクションF-F'



1. 1号溝セクションA-A'



2. 1号土坑



3. 同セクションA-A'



4. 2号土坑



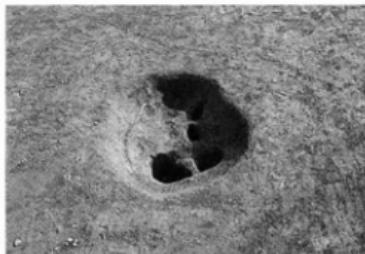
5. 同セクションA-A'



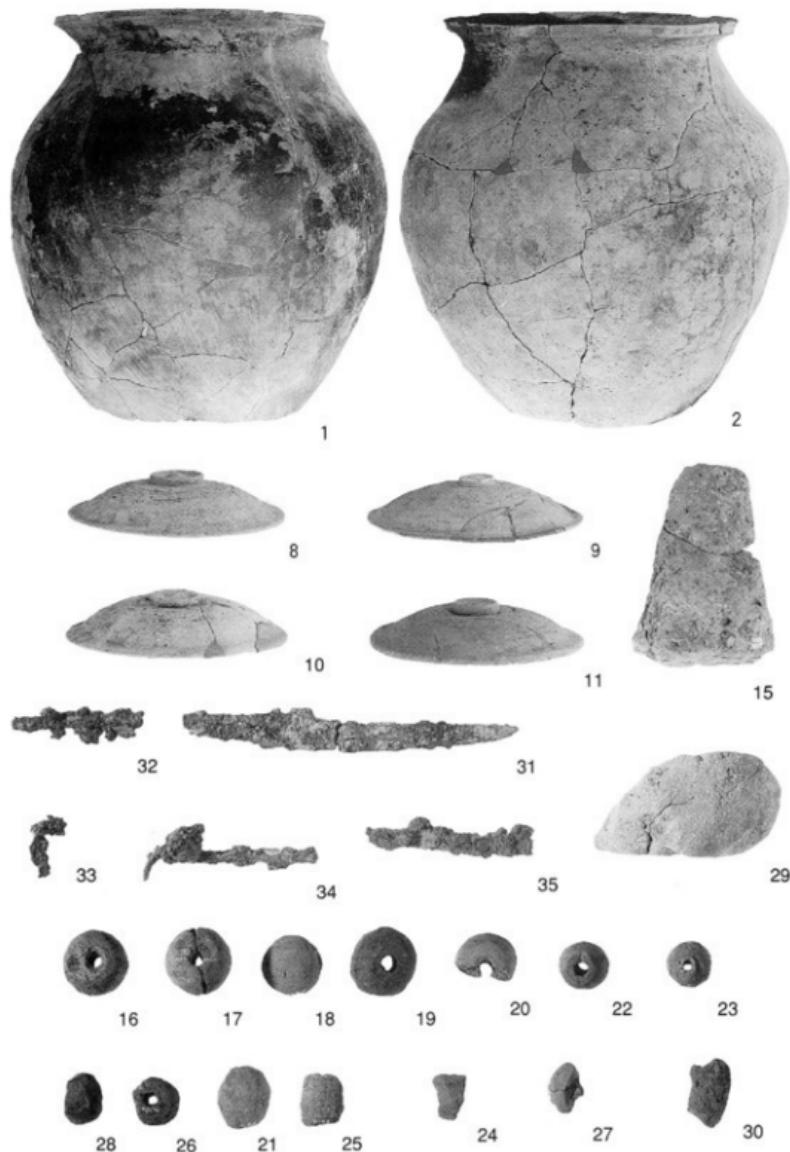
6. 3号土坑



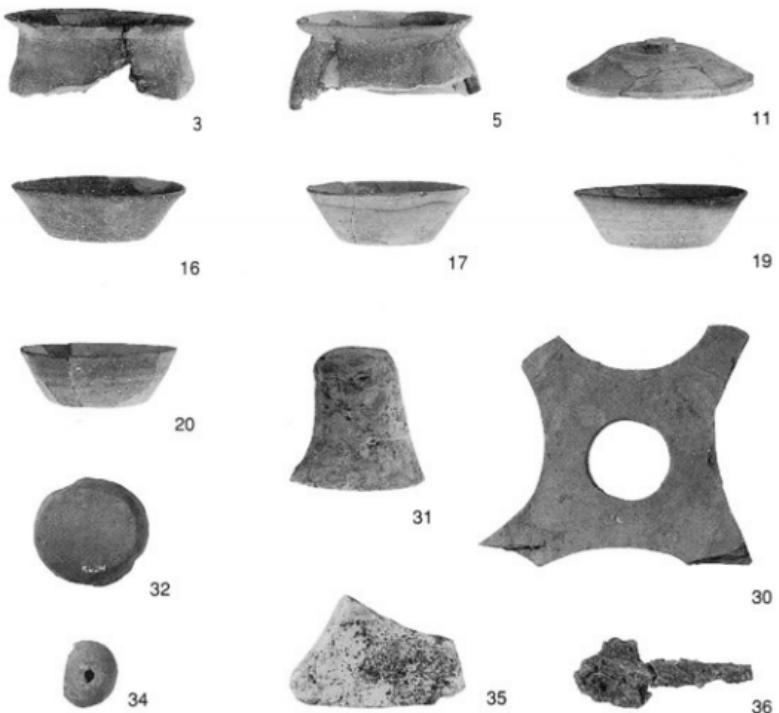
7. 4号土坑



8. 5号土坑



1. 1号住居跡出土遺物



1. 2号住居跡出土遺物



2. 3号住居跡出土遺物

八木茂小池平遺跡

印刷 平成 5 年 10 月 25 日

発行 平成 5 年 10 月 31 日

編集 山武考古学研究所

発行 玉造町教育委員会

印刷所 文化総合企画

TEL 0476-93-0593